



旧山古志村村長（現 長岡市復興管理監）

長島 忠美 氏

NAGASHIMA Tadayoshi

...

住民を1日も早く山古志へ帰りたい

—雪に覆われた山古志村も雪が融けて、先日自ら被災状況を視察されたときの思いからお聞かせ願えますか。

長島—山古志村は豪雪地帯ですから、雪はいわば宿命です。被災して大雪というのは少し過酷であったなという感じがします。今回、山古志村の状況を確認して、正直なところ、被災後よく雪に耐えてくれたという反面、やはり雪の影響で厳しいところも出ているなということを率直に受け止めてきました。

また、雪の間は被災の状況が見えなかったところがむき出しになった状況を見て、改めて復興への新たな使命感も感じました。

—これから復興に向けて、この1年は次の雪までの対策がポイントになると思いますが、何から手をつけていきたいとお考えでしょうか。

長島—一番したいことは完全な状態でなくてもいいから、住民を1日も早く山古志へ帰すことです。一緒に復旧工事をやれるようにしてあげたい。まだ全集落にわたる工事用道路を含め、大型車が通行できる道路が確保できていません。道路をまず確保し、その他のインフラは住民とともにつくればよいと思っています。とにかく、道路と埋まった沢の水の流れを元に戻したい。

根っこが枯れないうちに

—村に戻り復興を進めるにあたって、住民に対して気遣うことはありますか。

長島—大切なことは、住民が状況をきちんと受け止めて、村に戻り復興する覚悟を決めることだと思います。もちろん、その声を聞いて受け止める私のほうも覚悟を決めなければいけません。災害というのは誰の責任でもありません。みんなで力を合わせて乗り越えていくという、支え合いの気持ちが重要だと思います。

誰が欠けても集落は形成できません。当然、最終的には住民が選択すべき問題ですが、みんなの協力が必要だという

認識のもと、復旧を始めるべきだと思っています。

—三宅島では、長い避難生活で若い人が現在の生活に慣れ、島に戻る気持ちを失いつつあると聞きますが。

長島—私どものところは中山間地で雪も深いし、生活するには非常に厳しいところでもあります。若い人には、ある部分都会志向はあると思います。

今は、村民生活をいわば根っこごと引っこ抜いてきている状態です。山古志の大地に再び根っこを下ろしたいという気持ちがある以上、1日も早くその土に触れさせてあげないと根っこが枯れてしまいます。場合によっては意と違うところで根を張り出してしまったら、もう抜けないかもしれない。何回も何回も根を抜くことはできないという気持ちがあります。ですから、1日も早く戻りたいというのが率直な気持ちです。

—村民の強い団結心の背景には長島—みんなが力を合わせて、いろいろなことに挑戦し乗り越えてきたからこそ、過疎といいながら今でも集落を形成してこれたと思っています。それが長い間培われた歴史や文化を共有するという気持ちだろうし、助け合って生きて



いこうという気持ちだと思いません。今生きている人は、その大切さがわかっています。何事にも変えがたいというのではなく、山古志に住んで自分がその中にいることが、私どもの生活そのものが生きざまだというふうに、私どもは感じています。

われわれの生活そのものが景観の一部

——住民の方々を安全な地域に戻すことが前提になるかと思いますが、何か配慮していききたいことはあるでしょうか。

長島——とりあえずは、できるだけ元の住居の近くに戻したいと思っています。そして、14ある集落のコミュニティ機能だけは失わないよう、集落単位で戻したい。もちろん、場合によっては2つの集落が一緒になって移転することもあるかもしれません。ただ、もとも

と持っていた個々の集落の良さだけは失わないようにしたいのです。長い間一緒に生活し隣にすることで、知らず知らずのうちに互助の精神が生まれています。それが助け合い、支え合いであり、お互いを尊重するという気持ちになっていると思うのです。私は、そういう機能を維持したまま戻りたいのです。

——復興予算にも限界があると思いますが、やっておきたいことはありますか。

長島——われわれは限られた予算の中で、できるだけ有効にということやってきました。中山間地もメインになり、周辺が発達していくような道路の切り方も必要なのかなという気がします。道をきっかけに地域住民の方々と行政とが連携し、美しい景観づくりを図ろうという、“シーニックバイウェイ”という議論があります。

まさにシーニックバイウェイを中心にしたまちづくりができる可能性も、これから示していきたいと思っています。われわれの生活そのものが景観の一部であり、そこにいて温かさとか、ふるさと感が伝わる集落形成も必要だし、歴史や文化も伝えられる道ができればと思っています。

村長として『捨てる』覚悟、『戻す』責任

——今回のような有事のときには、さまざまな決断をされて大変だったと思いますが。

長島——そういう決断は、本当はしたくありませんね。私どもの災害のときには、住民の情報が十分聞けない状況の中にありました。管理者としてすべてを把握するために、ヘリコプターに乗って村民の状況を視察しようと思いました。

しかし、その時点で人がなどの情報が寄せられました。私はとにかく命を守るために、ヘリコプターをそちらに回すことを決めました。救出された人たちが見た情報だけは寄せ



雪解け後の視察 写真右下、帽子の方が長島氏（長岡市・提供）



雪解け後の榑木集落（長岡市・提供）

てほしいとお願いをし、その情報を照合して、私自身は村内の状況を把握するよう努めました。

今振り返ると地震の中で全住民の状況が把握できないなか、少数の方のことを優先してよかったのかと思います。自分では冷静でいたつもりではいましたが、ある意味冷静でなかったかもしれません。しかし、なんとか命だけは助けたいということで決断をしました。ただ、せっかく助かった方々を、再び奪うようなことはしてはならないということだけを考えていました。

——被災前までは静かで豊かな自然の中の村長でおられたわけですが、被災されたことで自分の意識の中で変わられたことはありますか。

長島——災害を受けた当時、私は村長としてどう責任を果たしていくかというところに置かれていました。

平時には、村の中で住民の命と生活を守ってあげるのが、私に課せられた最大の仕事で

す。それが震災によってすべて崩れました。そして本当は一番してはいけないことなのかもしれませんが、私は決断をし、村の人たちにすべてを捨てて出るように言いました。そのことに対する責任の重さというのは、災害前の命とか財産を守るという単純な言葉だけでは言い尽くせるものではないと受け止めています。私が「帰ろう、山古志」と言ったときに、私に従ってくれた住民たちが一緒にやろうと言ってくれて本当にありがたかったです。あれだけ切羽詰った状況の中で、その覚悟を決めた村民の気持ちを考えると、百パーセントすべての人を戻すことが私の責任です。緑のふるさとを取り返し、その姿を見極めるまでは、私は死ねないと思いました。

判断し行動できる人材とネットワーク

——今回の震災では発生時刻も遅く、暗くなって情報が得られにくい状況にあったかと思います。そ

うした経験を通じて、今後のまちづくりについてどのようにお考えですか。

長島——これだけの文明社会の中でまったく情報が途絶するというところだけは、私も想定していませんでした。最悪歩いてでも情報を伝えられると思っていました。まず、そんなに高度な技術でなくていいから、最低限1本だけは連絡のとれる施設がほしい。

もう1つは人材についてです。災害時にたとえ孤立してでも対応できる人材を、集落やコミュニティなどの地区ごとにいかに養成し配置するか、最優先に考えるべきと思っています。

私という人材とは、端的に言えば災害時に自分がその状況を把握して、最善の努力を尽くし自分の判断で行動できる人を指します。自分が命を守らなければならないときに、そのことを最優先にしてどうやって動けるかということが重要となるからです。

平常時から、上司の指示待ちで働くのではなく、自分は

インタビュー

会誌編集幹事長
嶋田善多



何をすべきかを考え行動する必要が
あります。

——長岡市には、全国 33 自治体から 34 名の技術職の方が応援に来られています。地方自治体からみて、復興事業の業務量はどのようにみ
ておられますか。

長島——市町村では、災害を想定して職員を配置しているわけ
ではありません。これが 1 週間や 10 日で解決する問題でしたら、職員の尻を叩けばすみ
ます。長期になりますと、専門的な技術者が足りなくなることは目に見えています。今
は長岡市になりましたが、旧山古志村では、通常の業務からい
えば数十倍の規模の災害を受けたわけですから、それをクリアするためにいくら職員に
頑張ってもらっても、許容量を超えています。実際、応援に来ていただいた方々の仕事
ぶりには頭が下がる思いです。

今回は、全国のいろいろな団体から応援をいただきましたが、将来的にはこのような活動が真にネットワーク化されればありがたいと思います。特に、これまでのような近隣とか県内とか比較的近いところではなく、有事を考えると、

影響のない遠くのところともきちんとお互いネットワークをつくっておく必要があるのではない
でしょうか。

希望をつないでくれた 多くの人たちに感謝

——今年の 4 月に長岡市と山古志村が合併したわけですが、本来ならば村長として山古志に帰ってから合併させたいという思いもあった
のではないですか。

長島——私は本質的には、輝く地域になれない限り、単独で残ってとも思っていましたから、合併については、それほど抵抗はありませんでした。ただし、私は村長として、村民に対して大きな責任を負っているという覚悟だけはあります。私の顔をなんとか村民の見えるところにおいておきたい
と思っていました。長岡市から長岡市復興管理監の席を用意していただきましたので、復興の前線で、住民に対して顔を見せ向き合っていこうと思っています。

——小さな村が長岡市の一部に入ったことで、山古志という名前やふるさとが薄れていくという不安はない
ですか。

長島——確かに不安な部分は

あります。この災害で、私も 2,200 人しかいない村が被害を受けました。本当に皆さんに協力していただいて、世論形成ということでは 2,200 人できちんと発信をして、自分たちの意志を伝えることができました。大きな器の中に入っても、自分たちの地域に誇りと自信さえあれば受け入れられていくだろうし、発展して
いけるだろうと、私は思っています。

——最後に今回の経験を通じて、読者の方にメッセージがありましたら。

長島——災害の中で危険を顧みず、勇気をもって関わってくれた人たちが大勢いるということだけは、伝えたいと思いま
す。それと同時に、この悲惨な災害の中でもきちんと復旧していけるという姿を示してくれたのも、その人たちでした。皆さんが地道にやっていただいたことが、今日のわれわれを支えてくれているのです。われわれにとって大きな希望をつないでくれたことに感謝していま
す。

——復興活動でお忙しいなか、本日はどうもありがとうございました。